

第4回国際 CBRN 防御シンポジウムで講演しました (2018/9/3-5)

テーマ：CBRN 災害にどのように備えるか
会場：Berlin Maritim pro Arte Hotel (ベルリン, ドイツ)

2018年9月3日(日)ー5日(火)にベルリンで開催された第4回国際 CBRN 防御シンポジウムで、当研究所 災害医学研究部門の江川新一教授が講演しました。CBRN は Chemical (化学物質)、Biological (病原微生物)、Radiological and Nuclear (放射線・原子力)の頭文字で、特殊な対応が要求される災害を引き起こすハザードを意味しています。

CBRN シンポジウムは近年増加する複合的な自然災害や人的災害にどのように備えるべきかをテーマとして、EU を中心に世界各国からの参加がありました。ドイツやチェコは冷戦の時代からさまざまな CBRN ハザードに対処してきた歴史を持っています。北大西洋条約機構(NATO)を構成する各国の軍関係者、政府関係者、特殊ハザードに対応するための製品を開発している企業、科学者が参加しています。医療関係者は少数でしたが、イギリスでの CBRN 災害に対する軍医の教育と訓練、エボラウイルス病に対する対応と公衆衛生学的なアプローチの利点などについて学ぶよい機会となりました。

江川教授は「科学的な視点からみたレジリエンス」と題して、わが国で起きた地下鉄サリン事件(1995年)、東日本大震災における福島原子力発電所の事故による放射線災害(2011年)、西アフリカでのエボラウイルス病大流行(2014-2016年)を例にとり、CBRN ハザードが引き起こした実際の災害でどのように人々が対応し、どのような問題が判明したかについて講演を行いました。講演に続いてドイツ放送局の司会のもとにドイツ政府の市民防御・災害支援事務所、サウスカロライナ大学、フランス大使館の代表と江川教授を交えたパネルディスカッションが行われ、社会のレジリエンスとは何かについてディスカッションが行われました。CBRN 災害は特殊な対応が必要になるため、教育と訓練が大切であること、常に生まれ続ける新しいリスクとして研究が必要なことも強調されました。CBRN 災害はテロリズムと密接に関連していますし、また自然災害が CBRN 災害を引き起こす可能性もあります。放射線、化学物質、病原微生物をむやみに恐れずに適切に対応するためには、ハザードの特性、被害を受ける地域の脆弱性、対応能力についてよく理解する必要があります。テロリズムはいまや遠い国の物語ではなく、いつ身近で起きるかもしれません。社会全体として適切に対応するためには、政府や学術機関だけではなく、すべての人々が CBRN 災害に対する理解を深めることの重要性も強調されました。

江川教授は、テロリズムの源となる貧困や社会不安をなくすことの重要性を訴えました。仙台防災枠組と、同じく2015年に締結された気候変動に関するパリ協定や、持続可能な開発目標は、いずれも調和しながら平和や国際協力の重要性を述べています。特殊な化学物質や微生物、放射線に対する科学的な調査・解析・対処方法を研究することはもちろんですが、社会の中でそのような物質をどのように平和的に活用し、悪用を防ぐかが問われています。



CBRN の除染に活用されるドローン展示



ドイツ政府主催のシンポジウム



会場の様子



展示されている CBRN 用の個人防護具



基調講演で科学的にみたレジリエンス
について講演する江川教授



基調講演後のパネルディスカッション